〔抄録・未完〕

日本文学に見る——身障文芸

下

袴田利夫

〔抄録・未完〕

日本文学に見る——身障文芸

下

袴田利夫

《著者略歴》

袴田　利夫(はかまだ　としお)

大正９年(1920年)浜松に生まる。

先天的に右眼失明左眼弱視のため、小学校卒業後１年経て、按摩の徒弟奉公す。

後に浜松盲学校を経て、東京盲学校在学中に衛生兵として応召。敗戦後、盲学校教諭から肢体不自由学校で機能訓練を担当し、勤続30余年で退職する。

現在、鍼按開業準備中。

現住所　神戸市垂水区舞子坂２丁目4-6

〔抄録・未完〕

日本文学に見る身障文芸(下)

1982年4月25日 初版発行

著　者　袴田利夫

発行者　梅田正央

発行所　関西図書出版

大阪市西区京町堀1-18-23

電話／(06)443-1012　振替／大阪3318　〒550

印刷／大阪エンタプライズ株式会社　製本／(有) 中村製本所

〈検印省略〉

落丁・乱丁の場合はお取替えいたします

©TOSHIO HAKAMADA　Printed in Japan

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第一章　現身の蛭子たち

――肢体不自由（児）者の部――

日本身障文芸での蛭子とは　……2
資本主義的省力社会の疎外者としての身障者　……4
蛭子の古典　……6
江戸小咄に出る足の不自由　……13
民話に活躍する肢体障害　……15
昔の日本人が持っていた身障者への思い　……17
日当山のシュジュどん伝説　……22
万葉足萎歌　……26
戦時下の身障者　……28
多士斉々の身障傑出　……31
重障者と安楽死　……32

身障作家花田春兆のこと……36
名月を拝んだ木歩……47
一寸の虫にも……48
三つの無財の恵み……52
逆境が運命を創る……54
久子さんの述懐……55
身障者の望ましい人間像……59
身障者の努力は当然……60
逆境が第二、第三の無呼の法悦を生む……63
キリストに支えられて……65
ヨーロッパ車いす旅行の疑問……70
身障文芸西東……74
筑波詩人のうたうお才……79
恨みつらみの戦後の身障文芸……82
宗教と身障者……85
健康者の見た身障美談……96
甘えの構造と戦後の障害者……99
身障者よ詩歌に魂を翔ばせ……106

健障共栄の念い……109
悲常性に耐える幸せ……113
一匹の鯛に喜ぶ恵比須様……117

第二章　萎身燃生の輩

――生命の炎群の響――

寒かろう痒かろう人に逢いたかろう……120
私の人間観……138
癌に開眼した人々……145
不自由に耐える……149
……162

第三章　昭和万葉集身障詠歌

――講談社版「昭和万葉集」全二一巻――

「病み伏して」よりの抄録詩……177

第四章　新聞投稿にみる身障詠詩歌集
朝日・神戸・サンケイ各紙より　……226
第五章　身障関係の諺、格言、慣用句、地口、もじり、言い伝えなど　……263
第六章　私のしんしょうざつえい　……296
ようせつ句　……301
詩
吾が愛する詩によせて　……313
黒い貝　……314
K少年の言葉から　……315
あるC・P少女の歌える詩　……317
雪は天上の音信(おとずれ)か　……320
試作・女生校歌　……321
スクールバスの歌　……323

山彦の詩 …… 324
大空は私のキャンパス …… 325
星の幼想 …… 326
女生の子供の歌 …… 329
あした天気になあれ …… 331
心の松葉杖 …… 332
夏がことしも …… 333
車椅子の子守歌 …… 334
野の仏に捧げる詩 …… 335
めくら行進曲（二元唄）東京行進曲 …… 337
昭和三十八年（一九六三）六月二十三日の事 …… 338
少年と蝶 …… 342
お前は蓑虫 …… 344
この広い青空の何所かで …… 345
障詠歌集 …… 349
しんしょうざつえいの奴録を終って …… 418
あとがき …… 421

第一章　現身の蛭子たち

肢体不自由の部

蛭子とは古事記に誌されている肢体不自由者に関する記事と目される我が国初の記録に見えている言葉である。

この点についての詳細は、後で述べる予定であるが、さて肢体不自由を身障文芸考で一番終りに取り上げたのは、別に深謀遠慮の企みがあった訳でもない。取り立てて誌す程の意識を歳しているのとも違う。これらを初めにご了解を得て置かないと「何故？　最後にしたのだ。差別も甚しい」と捻じ込まれても、これと言った理由もないだけに返答のしようもなく困ってしまう。敢えて屁理屈で言い逃れでもすれば、同時に違った事を一つの口から言えないと同じだとこじつける外はない。

日本身障文芸での蛭子とは

私はこの項で、対象としたいのは、進行性筋萎症や重症のC・Pによる重複心身障害者等その他を「現代の蛭子」と題して取り上げたこの言葉は、ご自身も重度の脳性マヒでありながら文筆活動を続けておられる花田春兆氏がある婦人雑誌に寄稿した表題から拝借した一句である。

肢体不自由者の総べてを現身の蛭子とするは、些かの抵抗もあろうし、肢体障害者関係の人々から「現身の蛭子」にされてはやりきれないとの反論もあろうが、ここでの焦点は先にも挙げた数種の傷病もさる事ながら、労災事故による四肢の切断は勿論、グリムにもある親指小僧と言った類、日本昔話風に分類すれば小子部物語。それに生まれた時から鉢を被っていた御伽草子の主人公はもとより、遂には歩けなくなる遺伝性舞踏病（と、この項の中程で述べる「父ちゃんのポーが聞こえる」にも出る浪曲）等の身体異状をテーマにしたからと言って、茶呑み話の種にしようとするものでないから、私の真意をご了解頂きたい。こうして障害者、特に肢体不自由を語るに当って、これ程に陳弁之努めなければ関係者から何を言われるかも分からない薄氷を踏む心配りで進めなければならないとは不自由この上もない窮屈さである。

能狂言の出し物に「三人片輪」がある。これを新潮社版昭和三十年刊、日本文学辞典四一〇頁藤村作編から転写すると、

或る主が仔細あって、片輪者をあまた抱えようと高札を打つ。そこへ博突者が座頭になり、日頃足の達者な者が躄となり、また口の利く者が唖を装うて行って、それぞれ抱えられる。主(あるじ)が座

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

頭には軽物（絹布類）藏を、壁には銭藏を、又啞には酒藏を守らせて外出すると、座頭は眼をあけ、壁は足を伸ばし、三人互に知合いなので、談合して酒藏の酒を飲み、一座賑やかに酒宴となる。所へ主が帰ってきて、この低体（ていたらく）に驚き、とど大盗人め、やるまいぞやるまいぞで追い込む。と言う他愛もない筋。一読してお分かりのように身障振りを真似した寸劇だから目くじらを立てる必要もないが、次の川柳は少しく解説を必要としよう。

跛引きそれ攻めよ　それ掛かれ

これは武田信玄の軍師とも言われた山本勘助を耶喩したものである。因みに小学館版で昭和五一年に出した日本国語大辞典全二十～十九によれば「室町末期の兵法家、字は晴幸。近江国（滋賀県）の人、武田信玄に軍師として用いられ川中島の戦いで戦死したなどと伝えられる。生没年未詳ともある。これが女性になると、

足引きの娘につける家屋敷

と相成るだけでも結構だと言わねばなるまい。江戸の庶民はこんな事まで知っていたのだから随分知的遊戯を支えるだけの文化水準も高かったと見える。もう一つの例として、

跛（おんば）には豆腐屋だけにはやらされず

この句も説明の要はない。足を引きずり引きずりガタビシ体を左右に大きく揺（ゆす）って買いに行っ

た豆腐も笊の中で崩れてしまっては、冷奴にする訳にも行くまいが。と、からかいとも受け取れるが、その半面他の場所では役に立っていると考えてはいけないだろうか。

私は胴体を輪切りにされた男が、上半身は風呂屋の番台に坐り、下半身は罐焚きをする落語は、適所適材には違いなかろうが、「毎度バカバカしいお噺し」過ぎて真面目にお付き合いもして貰えない。

資本主義的省力社会の疎外者としての身障者

鳴子引く手元を見れば盲なり

この川柳から江戸時代には身障者もそれぞれに相応しい稼ぎ場が用意されていたとも想像される。これは身障者雇用促進法を論ずる前に一度反省してみなければならない警句であろう。

農業もコンバインで象徴される水稲革命によって、今の若い人達には、鳴子も見た事もないのだから雀脅しの鳴子引き作業は、農業機械によって盲人の働き場所を奪った。こと程左様とまでは言えないにしても長距離列車の中で売られていたお茶の容れ物は、つい一昔前までは、素焼にも等しい簡単な土瓶だった。そのひなびた粗末さに却って親しみを感じ、要らなくなった後も一輪挿しの風雅を愛でたものであったが、今では大工場で大量生産するプラスチックの容器では、お茶のほろにがさもふっ飛んでしまい、信楽の町で焼物を手作りしていた精薄者の仕事までを奪

って顧ないのが、資本主義社会を支える量販冗費を煽るのが人間生存の一面ではなかろうか。そうして、今までの手作業を分業合いお喋りを楽しみながらの仕事場もオートメ化し、効率を上げるのが文明開花であるにしても、機械の進歩は、物を介しての心の触れ合いを拒み、身障者に適した単（純）馴反復軽作業としての家内工業的な所謂、内職に活路を見出し得た、僅なチャンスをも剥ぎ取ったのが高度資本主義工業は又、一方にあって管理社会としてのコミュニケイション・ギャップをもたらした。

米作りの殆どが被支配される側の過酷な労働の上に成り立ち、五公五民を超える年貢を収奪され、徳川末期とさして変わり映えのしない戦前の田舎では、主だった畠仕事もまゝない程度の頭の人にも、それなりの指図を受け使い走りをしては、それに見合う労賃とまでは行かずとも、お駄賃位は得ていたのだから、生活保護法等も不備な時代にあってさえその地域では、立派に働いているのだとの認め合いが、自・他にあったから、お上の世話になっているとの卑屈さもなく「あんなバカで何の役にも立たず俺達の税金で食わしているのだ」との厄介者扱いもしなかったから、福祉の受授の間に横たわる権利義務の間隔にぎくしゃくした取り引きで動く事務的な杓子定規もなく、両者の間にさしたる人間疎外も生まれなかった。経済大国に成り上った裏には、こうした社会的弱者への配慮に欠けた上に貿易収支の黒字と裏腹に民の心は衰えて国独り肥える。GNP三位とかを成し遂げ、エコノミック・アニマルと世界の憎まれっ子になったばかりか、身障者に優先開業権を与えていた煙草店も、自動販売機の進出で、有名無実となって久しい。この面からもまた、私が年来抱いている福祉への基本的な考えの一つである「人間生存即社会病理」が証明

される重要な一因である。人間は何らかの犠牲を他に強いねば生活が成り立たぬ。人間はローマ、ギリシャの昔から「人はエトスの乳によって育って来た」人間は人間によってのみ人間たりうるとの省察から、人間は人間と自然に対して責任を取る心構えこそ社会病理の原点としなければならない。「昔はよかった」等と私は懐メロ的懐古趣味を楽しんでいるのではない。機械文明はチャップリン演ずる職工さんを作るものらしい。

蛭子の古典

さて次は本項の初めに書いた蛭子は神代の巻に出るイザナギ・イザナミの二柱の神が、国生みに際し天の御柱を互に逆廻りで婚（みとのまぐわい）し子供を生んだのが、初めは出来損いの子であった。「日本書記」によれば、三年経っても足が立たず天の槃機樟船に載せ流し捨てた、とある。他「古事記」には葦船に載せたとも言う。人はここだけを捉え「だから日本人は国の肇（はじま）りから身障者に理解のない証拠で、無慈悲なのは先天的な体質だ」と、きめつける事によって、福祉先進国と目される欧米の水準に追いつかせるべき一つの手段として、発破を掛けるだけの効果を狙うなら、それも認めもしようが、人間の考えていることなんて、必ず反対の面があるとは言えないまでも、相関、対立の裏があり、世の指導者らしき発言が、緑の草の会等と言う身障団体が一種のプレッシャー・グループに豹（ひょう）変させる逆効果に私をして「個の福祉か、個の持続か」の併存と対立を考えさせ二者択一を人類に迫りこの社会を悩ませるのではないか。日本人の身障

観が無策であると、心からそう思い込んで福祉はなっていないと、こき降す新しがり屋にこの点を質したい。

尚、同名問題について三重大教育学部の三沢義一助教授は「教育と医学」誌昭和四八年一月号の二六頁で論じておられるが、「慶応通信」の出版物を読むような特殊教育関係者ならば、誰しもの常識になっている記事であり、私の観・想と氷炭相容れざる憾みもないではないが、たかが按摩談議では歯も立たないので、ご関心の向きは乞う一読。

この蛭子説話について女性からの求婚は、生物の原理に反する故、禁じたとの説もある様だが、それはさて措き、東南アジアに広く語られる兄妹相婚型の人祖型伝説のタイプに属する。そこで一般に、最初生まれた子は不完全で後になり、天神の命で特殊な儀礼を行った後、結婚して今度は成功し、人類の始祖となったとも言うのである。

このように、日本昔話事典七八九頁は解説し、台湾やミャオ族の話を載せてはいるが、日本のように、西宮の海岸へ流れ着き「この男、足萎えではあるが、漁りが巧みであり、村人に教えたので漁民達は、恵比須と崇めた」のが人も知る西宮神社の由緒である。我が国以外でも似たような説話では、捨てられた蛭子が、こうして再び蘇生したばかりでなく、地域で重要な役割を荷い、神にまで祭られているかどうかは、寡聞な私には不明である。

そこで西宮神社へ直接問い合せたが、「えびすさま」が何時の頃から聾と思い誤まれたか、又、恵比須大黒を含め七福神の大部分が「弁天をのけると後はかたわ也」と江戸の川柳子は、何のてらいもなくあっけらかんといなしている様に異形であるかの理由も定かでない。との、返事であ

った。それならば自分で調べる他はないのだが何分にも手許の資料が乏しく、弘文堂が昭和四七年に出した大塚民俗学会編の日本民俗学事典を主軸に平凡社版大百科事典等から総合すると「恵比須信仰について」は、「日本の民間信仰において生業を守護し、福利を招来すると、信じられている神霊の一種。中世期以降は七福神の中に加えられ、大黒と共に代表的な福神と目された。もともと漁民や海人間に発生した信仰と考えられるが、今日では、商業神や農業神の性格をも付与され、複雑な様相を見せている。その語源も明確ではないが、異人の意である夷に由来するもののようで、異郷から来て幸をもたらす神という感覚は否定しがたい。漁村においてはクジラやサイ・イルカをエビスと呼び、また海難者の死体や海中から拾い上げられた石、または海岸に流れ寄るものをエビスと呼称し更に漁網の中にある浮標をエビスバアと呼ぶ等、総じて海から寄り来る神霊で、漁の幸をもたらすと言う心意は共通している」（後略、日本民俗学事典八六頁、亀山慶一）

このように記録されるには、私達の祖先の「思いやあこがれ」を「海の向うに妣なる国」を説き解した折口信夫と同じ様に「海上の道」を弁天様は「インド神話にあらわれる。河川神サラスバティで、美音天、妙天音楽、大弁才天女等とも訳される。もともとサラスバティの河を神格化したもので、妙音と能弁とはその河の流水の音楽そのものであったといわれる。したがって、もとは、音楽や弁説（智恵）の神であったが、わが国へは仏教とともに伝来した」（中略）「特に近世以降七福神の信仰が行われるようになって民間にまで滲透した。弁天の祠が多く水辺にあるのは、もともと水神としての神性が日本にも定着したものと考えられる」（前掲書六四一頁、亀

山慶一）については、盲人の部、特に琵琶法師や杉山検校等に関した項で取り上げているから、これ以上触れるのは控える。

蛭子が七福神に仲間入りした経緯については、大百科事典十一巻の七三七頁で梅田氏は次のように解説しているのでその大部分を拝借しよう。

「手足などもなく、不具で蛭の如くに軟弱であったに由るといい、或は日女（ひるめ）に対する日子（ひるこ）で尊称に出るともいう。後世夷神（えびす）と混同し福徳の神、航海守護の神として七福神の一とせられるに至った。諸国に蛭児を祀る神社は少なくないが、就中、夷神として有名なのは西宮神社で、土俗夷宮と称して蛭子を祀った社としてあるが、果して蛭児であるか否かは諸説あって一定しない。要するに中世以来盛んに信仰せられた夷神もしくは夷三郎神に、この蛭児の神を附会するに至ったもので、三者分かつべからざるものの様になったのである」との記事通り「何れにしても最初から七福神が一定していなかった事が分かる。神道家は大黒天をインドの摩訶迦羅でなく、日本の大国主神とし、弁才天女を市杵島媛尊、蛭子を少彦名命として、ともに日本の神とし、昆沙門天は天竺、経山寺の布袋和尚は漢土、福禄寿は琉球の神、それに天南星の寿老人を加えて七福神とした。と言う」（後略、前掲書第六巻、坂本、述四七五頁）

このように室町時代の前後、私達の祖先が捉えていた世界を、我が国を含めて唐、天竺の三国だけと思われていた頃、外来文化の東漸に従って、インドや中国の神仏習合や民間信仰が織り混って、日本人の民衆説話の中にも生きて、私達の精神構造の一方を形作ったと思われる中に身障者は生きていた。何れにしても頭がひょろ長かったり、慢性の肝臓疾患ではないかと、心配され

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com